

Title	ドウ・ルーヴァー著 フロレンスの一織物会社
Sub Title	Raymond de Roover "A florentine firm of cloth manufactures"
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.6 (1954. 6) ,p.683(97)- 689(103)
JaLC DOI	10.14991/001.19540600-0097
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540600-0097">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540600-0097</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

概況については

H. H. Баранский: Экономическая География СССР, 1953T.

以上の他マンコンフ報告、年次公表などを利用した。

(註三) The World's railway 1952—53

(註四) この部分は主として

J. H. Blackman: Transportation > A. Bergsoned.

Soviet Economic Growth, 1953. <を紹介・解説したものである。

(註五) 鐵道の貨物増加率は第四次実績では四四・六%であるのに第五次目標は三五・四%と若干低められ、河川は四次実績二六%に對し、七五・八〇%の増加を第五次の目標としており、自動車は第四次実績増加率一三〇%に對し第五次目標では八〇・八五%増加豫定となつてゐる。これは第五次の政策目標が、河川に重點をおき、鐵道の貨物を相對的に減らし、自動車貨物も相對的に減らすといふことである。

(註六) Carbutt: Russian Railways, p. 80

Kaplan: Capital Formation and Allocation, 1953.

(附註) ソ連の鐵道の發達を考える場合、勞働生産性をみることは重要な一つの指標である。この點については若干、レディングの論文を参考しておきたい。(A. D. Redding: Employment and Productivity in the USSR Railroads, > Soviet Studies < July 1953.)

ここでいう勞働生産性は従業員數で鐵道輸送量を割つたものとして求められたソヴェト側の數字である。

ソヴェト鐵道の勞働生産性(千キロメートル)。

1928...197	a	1945...275	e
1930...204	b	1946...283	
1933...254	c	1947...292	
1937...371	d	1948...334	
1940...364	e	1949...373	
1941...363		1950...393	

(註) a: 旅客・貨物輸送の収入(千ソヴェトキログで算出)

b: 實際の貨物輸送(千ソヴェトキログで算出)

c: 實際の旅客・貨物輸送(千ソヴェトキログで算出)

d: 實際の輸送(千キロメートル)

e: ベルカツク鐵道や新領土を含む(これを除けば1940...397.2)

右の表はソ連鐵道の成長を大略示してゐる。そしてアメリカの經驗からみて、右の成長は決して不合理ではない。最後にソ連鐵道の成長を概観する表を掲げておこう。

1928年 = 100	1931	1934	1937	1940	1945	1950
雇 用	127	129	145	169	174	204
輸 送 量	192	245	389	450	351	618
勞働生産性	151	190	271	266	201	293

(頁上)

紹介

ドゥ・ルーヴァー著

「フロレンスの一織物會社」

Raymond de Roover "A Florentine Firm of Cloth Manufactures" Speculum Vol XVI, No. 1, January, 1941 pp. 3—83.

渡邊國廣

メディチ家は、中世のヨーロッパにおける最大の銀行家であつた。國際金融や外國貿易を第一とし、かたわら工場や鑛山の經營に關係してゐた。しかし産業資本家としてのメディチ家のこのような活躍については、從來看過されてゐる。ドゥ・ルーヴァー氏の近業は、メディチ家のかかる活躍のうち、特にメディチ家が投資するフロレンスの毛織物工場を扱つたもので、メディチ家に關する同氏の多くの研究のなかでも特に貴重な一篇といわなければならない。

しかしこの一篇は、メディチ家の活躍のうち、看過された面を取上げてゐるというだけで、重要なのではない。ドゥ・ルーヴァー氏の近業は、フロレンスの毛織物工業に關する多くの

ドゥ・ルーヴァー著「フロレンスの一織物會社」

研究のなかでも、特に注目すべき業績であつた。フロレンス經濟史の研究で著名なアルフレット・ドレーンも解明し得なかつたフロレンス毛織物工業の一面が、すくなくともメディチ工場に關する限り、この研究のなかで詳細に分析されてゐるのである。現に、利用した史料がメディチ工場について殘存する記録類であつたため、主として毛織物組合の規約書によつた從來の研究では説明し得なかつた點が明確にされ、たとえ一つの場面にせよ、とにかく第十六世紀における會社の内部構成の實際が明白となつた。この意味でドゥ・ルーヴァー氏の近業は正に劃期的であり、フロレンスの毛織物工業に關する從來の研究には見られない新しい内容を持つものであつた。

\* \* \*

一五三一年二月一日、ラファエロ・デイ・フランチェスコ・デイ・メディチ、その遠い親類に當るキリアスシモ・デイ・ロスソ・デイ・メディチ、ベルナルド・デイ・ドミニコ・パリオニの三人が、フロレンスのヴィア・ポルタ・ロスサア區に、ラファエロ・デイ・フランチェスコ・デイ・メディチ會社を設立した。この會社の目的はもろろん毛織物の製造で、その總資本額は四、六五〇フロリンであつた。そしてメディチ家のラファエロが二、四〇〇フロリンを、同じくメディチ家のキリアスシモが一、二〇〇フロリンを、又パリオニが一、〇五〇フロリンを醸出してゐた。ただしバ、

リヨニの場合、實際には釀金せず、單に經營者としてのその能力が一、〇五〇フロリンと評價され、資本金のなかに繰入れられたに過ぎない。

利益の配分に際しては、この出資率が、出資者の受取るべき利潤の率を規定した。すなわちラファエロは収益の五一・七パーセントを、キエアリスモ、バリヨニはそれぞれ収益の二五・八パーセント、二二・五パーセントを受取る事ができ、正に出資率に比例していた。又損失についてもこの割合で三人により負擔されるはずであつた。

そのほか、この三人の協定によつて、出資の期間を一應は一五三四年一月三十一日までと切るが、しかし期限が来た時、この期間は自動的に延長されること、従つて資金の回収を希望する出資者は、約束の出資期間が切れることなくとも六ヶ月前にその意志を示すこと、又會社の解散に際しては、債權者に對する支拂が最初におこなわれ、次いで直接の出資者であるラファエロとキエアリスモとに對する釀出金の返却が、もし可能ならば現金で、不可能な時には現物ですまされ、なお財産に殘部があれば、この二人のほか、バリヨニをも加えた三人で、利益の配分に當り既に設けられた同一の率に従つて分配することが規定され、又會社の金銭を他に貸代ける際には三人の出資者の同意書を必要とし、違反者はフロリンの罰金が課せられ、もし損害が會社に及べば、違反者においてそれを負擔することが約束されていた。そればかりではない。この會社の經

營を一任されたバリヨニについても、嚴重な行動の制限が設けられ、その果すべき種々な義務が規定されていたのであつた。

バリヨニがその時間と精力とを會社のために集中する忠實な經營者でなければならなかつたことはいうまでもない。そしてこの實を擧げさせようとして、例えば直接の出資者と違い、經營者であるバリヨニについては、他の仕事に關係することが許されず、もし違反が發覺すれば、罰金として一〇〇フロリンを直接の出資者に對し支拂わなければならないこと、社用のほか旅行は認めず、しかも旅費を支給されるのは、フロレンスを離れて遠く出張した場合に限ることが規定されていた。そのほか徒弟・賃銀取得者・職人の雇傭・監督・解雇が經營者であるバリヨニの義務としてかけられていた。

經營者としてのかかる職務に對しバリヨニは、益金からの規定の配當を除けば、何等特別の報酬も受けることができなかった。従つてもし會社が缺損した場合、バリヨニは、この損失について規定分を負擔しなければならなかつたから、かかる負擔分のほかに、實にバリヨニは、經營のために使つた時間上、精力上の損失をもあわせて甘受することとなつた。經營者としての失敗に對する罰を、正にバリヨニはかかる仕方においてつぐなわなければならないのであつた。

會社の實際經營についてこのようにならざる責任を持たされたバリヨニではあつたが、會計事務に介入することはできない

かつた。會計係を任命できたのは實に二人の直接の出資者であり、特に最高額の出資者ラファエロの權限がすくなくとも會計事務に關しては絶大であつた。すなわち協定によつて、メデイチ家のラファエロは、總元帳の管理、書簡の整理を自分の息子であるジュリアーノに委託し、又ジュリアーノに對し經營者バリヨニの補佐を命令することができた。ところで會計を一任されたジュリアーノは、この職務に對し二十フロリンの年俸を受取るはずであつた。又メデイチ家のラファエロも、もし希望するとなれば、經營に参加し、バリヨニと同じ權限を行使できたが、これによりもろん特別な報酬が得られるわけではなかつた。

このように、ラファエロ・デイ・フランチェスコ・デイ・メデイチ會社においては、既に資本關係と經營關係とが明白に分離されていた。メデイチ家のキエアリスモは、益金からの規定の配分を受ける單なる出資者で、協定によつて經營に参加することができなかつた。バリヨニは實際に釀金せず、經營を委託されていたというに過ぎない。メデイチ家のラファエロは、この二人の中間的な存在で、キエアリスモのようにならざる出資者ではなく、投下された資本の三分の二を持つことによつて經營に介入する權限を確保していた。事實ラファエロは、自分の息子ジュリアーノを會計係に任命することによつて會社の經理面を掌握でき、會社の決定に重大な影響を與えていた。バリヨニを實際の經營者というならば、ラファエロは

正に監督者、政策決定者であつたのである。

ところで出資者の一人であるキエアリスモが一五三三年六月二十六日、その出資金の引上げを通知して來た。これによりラファエロ・デイ・フランチェスコ・デイ・メデイチ會社は、一五三四年一月三十一日をもつて解散することとなり、清算事務には、規定によりバリヨニが當るはずであつた。しかし實際には、手持の材料を處分するため、營業は一五三四年八月まで續けられ、清算事務が完全に終つたのは、實に一五三五年二月のことであつた。その結果、總額一、五五四フロリンの益金が明白となり、ラファエロ、キエアリスモ、バリヨニの三人の間で、規定の率に従つて分配され、分け前はそれぞれ八〇三フロリン、四〇一フロリン、三四九フロリンとなつた。

以上によりラファエロ・デイ・フランチェスコ・デイ・メデイチ會社の成立から解散にいたるまでの事情が明白となつた。ではこの會社において毛織物はどのようにして製造されていたのか。

ラファエロ・デイ・フランチェスコ・デイ・メデイチ會社が、毛織物の製造を専門としていたことはいうまでもない。第十六世紀におけるフロレンスの大抵の毛織物製造業者が請負制を採用していたように、この會社も亦製造過程の或る部分を自分自身の仕事場で働く職人に請負わせていた。では一體製造

過程における部分が請負に出されていたのか。この問題に關しては、ラファエロ・デイ・フランチェスコ・デイ・メデイチ會社について残存する關係史料がないため、同じくフロレンスにあつたメデイチ家の毛織物會社で、一五五六年に設立された會社の記録から、類推する以外にない。

最初に準備過程についてであるが、この過程は普通三つの工程に分たれ、通例その大部分が親工場でおこなわれたとされているが、しかしメデイチ家の會社に關する限り、この想定は事實ではない。むしろメデイチ會社の場合、その一部のみ担当し、他は下請に出されていたのであつた。

準備過程の第一である羊毛を種類により區別する仕事がおこなわれた場所は、メデイチ會社の場合についても明確ではない。ただし羊毛を類別する職人が普通親工場の周邊に群居していたこと、又この職人がメデイチ會社で使われる羊毛を購入するための仲介人としてしばしば活躍したことは明白である。羊毛を類別する仕事に次いで、羊毛を洗う仕事がおこなわれた。準備過程の第二に當るこの工程は、明確に下請に出されていた。メデイチ會社は、この仕事を、洗い専門の業者であるフランチェスコ・デイ・ギオヴァンニ・デイ・ジュンタ會社に委託していた。この會社は、ゴラ運河の水を利用して羊毛を洗い、洗つた羊毛一〇〇封度について一磅、ほかに洗うために使つた明礬一〇〇封度について二十磅を受取つていた。洗い終つた羊毛は親工場に運ばれる。そしてここで夾雜物が

除かれた。この仕事を一任された人は、十人の頭と呼ばれ、十人の手傳いを使用してこの仕事に當り、一週間ごとに出來高により給金を受取つていた。もちろん十人の頭に對しては、手傳いに支拂わらるべき賃銀を含めて手渡されていた。給金計算の基準は、でき上つた羊毛一封度について八片から一志八片が普通であつた。ただしメデイチ會社には、このような十人の頭がただの一人しかいなかった。

これをもつていわゆる準備の過程は終り、羊毛は製造の過程に送られるのである。製造過程の第一の工程はすぐ仕事であり、この作業がどこでおこなわれたかは、メデイチ家のフロレンス工場の場合についても明確ではない。しかしいかなる場合にもこの仕事が、何人かの手傳いを抱えた特定の人に一括して委託されたことは明白である。ところで給金は、この仕事を直接請負つた人にまとめて支拂われ、この請負人は更にその使用人にこれを分配するという仕組になつていた。

すぐ仕事の次は、紡ぐ仕事であつた。フロレンスにおいては、この作業がもつぱら近在の婦人によつておこなわれていた。従つて請負人の存在がこの場合においても亦重大な意味を持つていたのであつた。この種の請負人には、横糸を紡ぐ仕事を専門に請負つた人と、縦糸を紡ぐ仕事を専門に請負つた人の二種があり、前者はけは立てられた羊毛、後者はくしけずられた羊毛と呼ばれた。一五五六年の記録によれば、メデイチ會社はただ一人のけは立てられた羊毛を使つていたに過ぎない。しかし

これに反し、くしけずられた羊毛を四人も使用していた。ところで紡ぐための材料は、この種の請負人によつてラバヤ手押し車でフロレンスの周邊に住む農村の婦人のもとに運ばれた。横糸を紡ぐ仕事を専門に請負つた人の場合、一時に九封度の材料しか農村の婦人に手渡さなかつたから、相當数の農村婦人をその支配下に置いていたことが類推できる。一方、縦糸を紡ぐ仕事を専門に請負つた人の場合、關係史料の不足から、その活動の詳細を知ることができない。

請負人は紡いだ羊毛一封度について支拂われたが、その率は紡いだ糸のできる織物の種類により、又紡ぐ材料により相違したことはない。なお給金は請負人に一括して支拂われ、まとめて支拂われたこの給金を請負人が直接仕事をした農村の婦人に分配していた。

しかし製造過程において最も重要な工程は、何といつても織る仕事であつた。従つてこの仕事が親工場、しかも經營者の直接の監督の下におこなわれたことはいうまでもない。現にメデイチ會社の場合においても、織る仕事の監督が、會社を管理する者の重大な義務としてかけられていた程であつた。

最後の仕上げ過程についてであるが、この過程も亦多くの工程に分れていた。フロレンスでは仕上げ過程について分業が相當に進み、各工程についてかなりの熟練者がいた。

例えば洗つて地をつめるため布を打つ仕事は、小親方によりおこなわれた。最初、この小親方は、富裕な地主から桶を借り、

ドゥ・ルーヴァー著「フロレンスの一織物會社」

農村の小川のそばで仕事をしていた。しかし後に、組合を結成し、共同で桶その他の道具を持ち、仕事を請負つた場合、組合からその道具類を賃貸するという形式になつた。メデイチ會社の場合も、洗つて地をつめるため布を打つ仕事をこの小親方に請負わせていたが、しかしそれに必要な道具類は、直接組合から賃借りして、仕事を委託した小親方に提供していた。布を伸ばす仕事のためには、大規模な設備が必要であつた。この設備は、布を伸ばす仕事に従事する職人の間の組合によつて所有され、必要な時には組合員に賃貸される仕組になつていた。なお仕上げ過程に含まれるその他の仕事のなかには、例えば布のふしを取る仕事、けはを立る仕事、けはを切る仕事、繕う仕事があつたが、これらは、家庭か、個人の小さな仕事場でおこなわれていた。

もし染める仕事、布になつてからおこなわれたとすれば、仕上げ過程の最後の仕事となつた。普通この仕事は、若干の資本と數人の職人とを持つ會社に下請に出され、その際染料が同時に手渡されていた。メデイチ會社の場合もこの例外ではなく、一五五六年の記録によれば、メデイチ會社は、數會社に染める仕事を請負わせていた程であつた。ところで染色業者といつても一様ではなく、大別して二種類あり、染料にタイセイ、アイを使う業者を、渡し場の近くに住む染色業者と呼び、又洋アカネ、えんじ、ブラジルや、赤・青・茶・黄を出す染料を使う業者のことを、優秀な技術を持つ染色業者と呼んでいた。



以上は、一五五六年に營業を開始したフロレンスのメデイチ  
イ會社の生産組織の實際である。しかも、第十六世紀のフロ  
レンスで活躍した他のメデイチ會社の生産組織も、これとほぼ  
類似していたから、今やラファエロ・デイ・フランチェスコ・  
デエイ・メデイチ會社の場合についても類推が可能となつ  
た。會社の經營を實際に委託されていたパリュニが直接監督  
するのは、生産過程における部分か、又パリュニの下で  
おこなわれない工程があるとすれば、生産過程におけるどのよ  
うな部分か、そしてこの部分はどんな仕方でおこなわれていた  
かが、大體において明白となつたのである。しかしラファエ  
ロ・デイ・フランチェスコ・デエイ・メデイチ會社の活動は、  
單にこのように生産の面にのみ限られていたわけではない。同  
時にこの會社は、商業的な活動をも営んでいた。ではラファエ  
ロ・デイ・フランチェスコ・デエイ・メデイチ會社のおこな  
う商業活動には、一體どのようなものがあつたのであろうか。

この會社の營なむ商業的活動の第一のものとしては、原料で  
ある羊毛の購入が擧げられなければならない。しかも原料につ  
いてフロレンスの都市當局は、國內産羊毛の使用を、悪質のゆ  
えに禁止していたから、業者はいきおい原料を外國からの輸入  
に仰がなければならなかつた。そして第十四世紀に至るまで、  
フロレンスにおける毛織物の製造業者は、スペイン商人を通じ  
主としてスペイン産の羊毛を購入していた。又第十五世紀には

イタリー商人を通じ、主としてスペイン産の羊毛を購入するよ  
うになつた。しかし第十六世紀に入りスペイン商人が勢力を回  
復してからは、フロレンスにおける毛織物の製造業者に對する  
羊毛の供給を一手に引受けたのは、實にスペイン商人であつ  
た。この頃營業を開始したラファエロ・デイ・フランチェス  
コ・デエイ・メデイチ會社も亦、上質のスペイン産羊毛を、  
スペイン商人を通じて購入した。その買入価格は、一〇〇封度  
について九フロリンから十四フロリン三分の二であつた。  
そのほかプロバンス産の羊毛がわずかばかり輸入されていた  
が、その質はスペイン産のものよりもよほどに劣り、従つて値  
段も、一〇〇封度につき五フロリン四分の一から五フロリ  
ン四分の三で、スペイン産の羊毛と比較してはるかにやすかつ  
た。普通、支拂は現金であつたが、實際には賣る側で支拂を大  
して強要しなかつたため、數日のおくれはあまり問題になら  
なかつた。ところで一度にこの會社が購入した量であるが、きわ  
めてわずかなものであり、二五〇封度入りの俵で、一俵から十  
六俵が普通のところであつたのである。

次にこの會社のおこなう商業的活動の第二のものとしては、  
完成した毛織物の販賣が考えられなければならない。元來フロ  
レンス産の毛織物の主要な販路はレバントであつた。第十四・  
五世紀のフロレンスで營業したメデイチ會社の場合もその例  
外ではなかつた。メデイチ會社はレバント方面への賣込みに  
かなり積極的なところを見せ、例えば、ペラに代理人を常駐さ

せたり、又レバント人の好みに迎合するよう特に仕上げに注意  
させたりした程であつた。

しかし第十六世紀に入つて設立されたラファエロ・デイ・フ  
ランチェスコ・デエイ・メデイチ會社の場合、もはや外國貿  
易には直接關係せず、その製品の輸出を、或る時はギリシャ商  
人に、或る時はスペイン商人に任せるようになった。又この會  
社は、その製品の國內販賣に際しては、自國商人の手をかり、  
特にローマやナポリから來る商人に對する依存度が大きであつ  
た。フロレンスの小賣商人も亦この會社の重要な顧客で、一般  
に外國人の貿易商よりも高く製品を買取つていた。なおこの會  
社自體も、主として貴族に對して小賣をおこない、例えば一五  
三一年には四反の毛織物をフロレンス公に賣つていた。

毛織物業者としてのメデイチ家の活躍は、とにかくフロレ  
ンスにおいて他を壓していた。しかし規模の大を誇つたメデイ  
チ家の毛織物會社の場合においても、年産は一二〇反から一  
五〇反が精々のところであり、今日とは比較にならない規模の  
ものであつた。にもかかわらず、この數量は、依然として、フ  
ロレンスの他の業者の平均生産量をはるかに上廻る數値であつ  
たのである。

フロレンスにおいてこのように重大な役割を果していたメデ  
イチ家の毛織物會社ではあるが、その内部構造は、從來看過

されてきた。ドゥ・ルーヴァー氏の近業は、フロレンス經濟史  
の研究史上におけるこの盲點を衝き、メデイチ會社に残存す  
る帳簿類によつて見事に解明している。その説明の大體は既に  
紹介された通りであるが、これをもつてただちにフロレンス毛  
織物工業の内部構造と看做すならば、あまりにも早計であらう。  
ドゥ・ルーヴァー氏の近業は、あくまでも個別研究の一例に過  
ぎないのであり、このような個別研究を重ねて行くことによつ  
てのみ、フロレンス毛織物工業の内部について概説することが  
できるのである。一口にフロレンスの毛織物工業といつても、  
その内部構造は複雑であり、一二の個別研究によるだけでは一  
言すらできないというのが實際のところであらう。